

パーソナリティ研究における生活史の位置づけ

本 田 時 雄

1. 経験・体験・生活

教育大にいた頃は、専ら実験的時にパーソナリティを研究していたが、女子大で教えるようになってから、実験の設備もないことや次のような理由で、生活や生活歴を考えるようになった。

すなわち授業での学生の反応や研究室での学生との話し合いを通じて、付属からあがってきた学生と外部から受験して入ってきた学生とでは何か違いのあることを感じたからである。私の同じ話を同時に聞いていても、受けとめ方が違うのである。突込んで聞いてみると、知的レベルの違いではなく、家庭環境、生育歴の差らしい。体験の差である。体験は多分に主観的であり、客観的な経験がその人なりに受止められ、取込まれたものである。したがって同じ出来事を経験しても、その意味づけは個人によって異なり、体験もちがってくる。だから同じ講義を聞いていても、学生によって受取り方は違い、戦争に関してさえ体験が違ってくる。

このような体験の積み重ねによって、極論すれば性格も形成されるであろうし、逆にその時まで作り上げられた枠組みによって経験の受けとめ方が異なってくる。このことは心理学者、C.Lewinという人が次のような式を提唱して説明している。

$$B = f(P, E) = f(S)$$

すなわち行動は人と環境との関数であり、また生活空間の関数である。ここでの環境とは、客観的な物理的環境ではなく、認知された主観的な心理的環境である。例えばこんな話がある。

「ある冬の日の夕暮れ、うらぶれた駅の近くの宿屋に1人の旅人が着きました。宿屋の親父は歓迎して、話もはずみました。そのうち『お客さんは駅からうちまでどういうようにして来ましたか』と尋ねました。『駅からこの燈火が見えたから真直ぐに』と答えた。親父は言った、『それは運が良かった。時々沼に落ちて死ぬ人もいるのに。駅からうちまでの間に沼がありますが、冬になると氷が張り、雪が積もるので分らなくなって、知らない人は落っこちることもあるんです。』それを聞いた旅人は一瞬、青ざめ、次いでホッとため息をついた。」

この話のように、旅人は客観的な環境を知らなかったもので、沼の上を歩いてきたが、もし知っていたらそうは行動しなかったであろう。また $f(S)$ は生活空間と呼ばれ、認知された生活の場を意味します。このように人は認知された環境条件によって行動することが殆どです。例外としては、無条件反射のように認知されない刺激によっても行動が生じることもあります。少なくとも健全者の場合、生活する際に、前意識の層はともかく完全に無意識の層における行動は皆無に近いと考えて良いであろう。

2. 生活史

生活は、空間と同時に時間から成る。生活空間に関して、心理学ではいま述べたように非常に抽象的にしか触れられないが、社会学では図1のように明確に定義されている。しかし時間の要因に関してはあまり触れられておらず、時間は歴史学の領域であると考えられてきた。

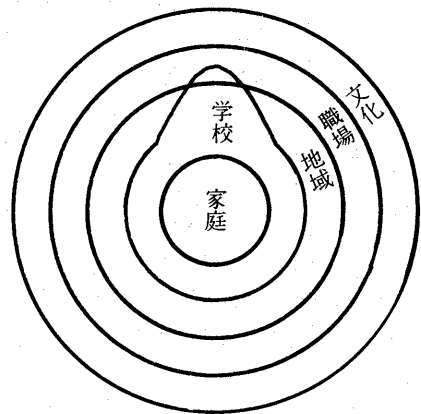


図1 生活空間の模式図

(私がこの大学に勤める時に、学長から「どんな研究をしているか」と問われ、「生活史です」と考えたら、「専門は心理学でしょう」とげげんな顔をされた) 歴史学においても、政治を中心とした研究が主流で、庶民しかも生活に関するものはきわめて少ない。最近、聞き書きという形での「個人史」や主婦たちが自分の体験を生々の形で書いた「自分史」などがかなり出版されています。社会学では「個人生活学」という用語が「個人史」に類似

した意味で提唱されています。が、未だ専門用語として学問の中に定着していません。これに類似した用語にライフ・ヒストリー、ライフ・サイクルがある。前者は文字通り「生活史」と訳されているが、その内容はこれまでの生活の歴史、すなわち「生育歴」という意味で、将来を含んでおらず、我々の考える「生活史」とは異なる。我々が将来をも含めるのは次のように考えるからである。すなわち生活は過去—現在—未来の時間的流れがあり、現在は一般に考えられているように過去だけによって規定されるのではなく、未来によっても規定されている。例えば教師になりたいから教員系大学を受験するなどということを考えていたければ直ぐ理解されよう。したがって我々の用いる生活史は未来・将来の予想や予測を含み、生育歴とは異なる。

ライフ・サイクルは、主として社会学において用いられ、生活のサイクルすなわち独身期、2人だけの時期、子ども1人の時期などと家族関係からとらえることが多く、かなり関係性に力点が置かれている。これに対して生活史は個性性に注目しており、個人史とほぼ同義と考えて良い。

そこで個人の側に目を向けると、図2のように4つの側面、①生理・生物学的(身体的)側面、②心理的側面、③社会的側面および、④精神・実存的側面が考えられる。すなわち精子と卵子との結合によって生理・生物学的存在となり、出生前に心理的側面が、そして出生時から母親などとの接触によって社会的側面が現われる。さらに第2反抗期を通じて人生観、価値観を自覚的に模索するようになり、精神・実存的側面が加わる。そして死に近づくにつれて、一般に精神・実存的側面から逆に失われていき、生理・生物学的側面が消失して死となる。心理学では、主観的な精神・実存的側面を従来認めていなかったが、臨床心理学や社会心理学などがしだいに問題にするようになってきている。

上に述べたような4つの側面が相互に絡みあい、ある時は身体的側面が、また他の時は社会的側面が生活の前面に出てくる。

そこで、図2を上質紙(25.5cm×53cm)に拡大し、学生に次のような要領で記入してもらった。①歴史の出来事：先ず記憶しているものをメモしてもらい、そのうち、その年が分っているものを記入し、次いで他のものを調べて記入する。両者を色分けで区別する。②人生の節目：人生の節目と自分で思った出来事を記入する。その際、将来のこともできるだけ予想して、または予定として記入する。③4側面：それぞれの側面において重要と考えた出来事を記入する。そしてそれらの関連を矢印によ

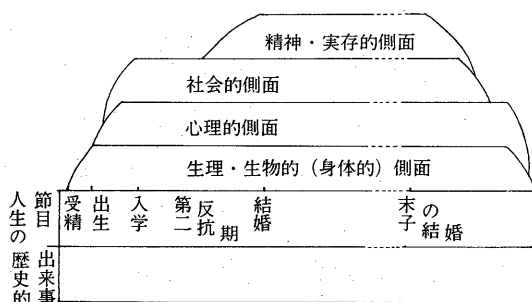


図2 人間存在の4側面の模式図

て示す。関連が明確でない場合には、関連ある側面に矢印を向ける、また他の側面に関連の全くない時は矢印をつけない。

以上のようにして作成された生活史年表(仮称)をどのように整理し、まとめるかは現在検討中である。

なおこの生活史年表以外に生活史にアプローチする手法としては、①日記や手記による手法、②逸話・伝記による手法、③調査や質問紙による手法などが挙げられる。

我々は、③の調査法による生活史研究を約10年前から行ない、日本教育心理学会を發表して、それを中心として「いま女性は」(福村出版)を出版した。また同様な研究を、同僚の野島正也氏の助力を得て行ない、「人間科学研究第2号」に發表しました。項項目は、生育歴、意愛・結婚、家事・育児、職業、教育観など多岐にわたり、15ページにもなりましたので、回答者には大変だったろうと思っています。

さて、得られたデータを分析する枠組はどのようなものがあるかという、次のようなものぐらいしかないようです。①コホート分析、②ライフ・サイクルによる分析および、③生活時間配分による分析。②のライフ・サイクルによる分析は、各ライフ・ステージにおける課題、ライフ・タスクの具体的内容とその達成過程などによる分析である。③は「人間の環境に対する評価は生活時間の時間配分に表現されるはずである」という仮説を準用して生活史を分析しようとするものである。

3. コホート分析

コホート cohort とは同時出生集団のことで、コホート分析はそれを要因として含む。あるいはそれをコントロールした研究法の総称といわれる。(表1)

発達(生活史)を研究する方法は、従来2つあった。1つはコホートを時間的推移にしたがって追跡する縦断的研究法あるいはコホート追跡研究法で、他はある時点でいくつかのコホートを同時に調査・測定する横断的研

表1 コホート分析

コホート	コホートA	コホートB	コホートC
出生年	1955年生	1960年生	1965年生
測定時	1955年生	1960年生	1965年生
年	歳	歳	歳
1965	10	5	0
1966	11	6	1
1967	12	7	2
1968	13	8	3
1969	14	9	4
1970	15	10	5
1971	16	11	6
1972	17	12	7
1973	18	13	8
1974	19	14	9
1975	20	15	10

cohort-sequential, time-sequential, cross-sequential
Shaie's tri-factor model

究法またはコホート同時点測定法である。これらの研究法は、いずれもそこに介在する時間的推移に伴う生活環境の変化（各コホートの置かれている諸条件）がコントロールされていないので、観察・測定されたものが年齢、コホートおよび調査・測定時点の条件のいずれか、同定できない。そこで第3の方法として斜断（交差）的研究法（cross-sequential）がクローズアップされる。これは異なるコホートおよび異なる調査・測定時点における同一年齢のりびとをとらえることによって上記の3要因を弁別しようとするものである。同じ10才であ

っても、10年前の子どもと今日の子どもは等しいところと異なるところがあるであろう。調査・測定結果が等しい所は、年齢の要因が強く効いていると考えられる場合が多い。もちろんコホートの特性と調査・測定時点の特徴が等しい場合もあり得るが、そのようなことは稀有であろう。違う所は、コホートと調査時点の差と考えられるが、さらに横断的研究との関連において両者は弁別できる。

以上の一例として、われわれの調査結果を表2に挙げておこう。これは女性が選んだ結婚相手の条件に関するものである。

コホート分析は、本来、調査時点の間隔が長くとも数年であり、人間のような寿命の長いものには適用がかなり困難である。しかしわれわれは、回想法および予想法によって、そこを補った。ただし回想および予想におけるバイアスがそれ程大きくないという仮定の下に。したがって人生設計が明確でない高校生以下には適用が困難である。

蛇足になりますが、我々が実験や調査を行なう場合、できる限り教育的配慮をすべきであるということを強調したい。それは必ずしも実施中でなく、実施後でも良いのですが。これまで実験や調査を手伝ったとき、単に力を貸すだけの場合と何らかの情報を得ながらの場合とでは後に残るものが非常に違ったからです。この調査では、①現在の生活を考えることおよび点検、②将来の生活設計を考慮したつもりである。

表2 結婚相手の条件の推移

	1920	'30	'40	'50	'60	'70 ('75)
(出生年代)						調査時点
T 大正生まれ (1911-25) N=28		性格 50% 健康 17% 将来性 17%	性格 45% 健康 30% 経済力 10%			健康 48% 性格 29% 経済力 10% 気があう 10%
S1 昭和1桁生まれ (1926-34) N=72		性格 37% 健康 23% 将来性 10%	健康 35% 性格 27% 経済力 12% 気があう 12%			健康 31% 性格 27% 経済力 14% 気があう 9% 人生観 9%
S2, 昭和2桁生まれ (1935-45) N=60			性格 47% 健康 14% 経済力 12% 気があう 12%	性格 42% 健康 19% 経済力 11% 気があう 11%		性格 27% 健康 25% 経済力 17% 人生観 17% 気があう 10%
S2, 昭和2桁生まれ (1946-54) N=74		結婚前 結婚時 理想		*性格 40% 気があう 25% 人生観 10% 健康 9%	性格 57% 健康 7% 気があう 7% 人生観 7% 同・別居 7%	*性格 36% 気があう 26% 健康 11% 人生観 11%
S3 (1946-56) N=136		(1位のみ)				

(T-S2₂; 既婚者, S3; 未婚者)

*S2₂, S3 の合計 (この欄のみ)

最後に研究対象として「女性」を選んだ理由として次のようなことを考えている。もちろん個人的に女性に関心を持っていますが、それ以上にずっと重視しているのは、女性が男性以上に年齢的にも時代的にも変化が激しいことである。別の観点からみれば、変身しやすい。男性は、家と働く場所の距離はいろいろ変化したであろうが、昔も今もずっと「食べる」ために稼いでいます（最近性役割を転換し、妻が外で稼ぎ、夫が家事をするという実験時試みもなされていますが）。これに対し、女性は、戦前には家や工場に閉じ込められ、戦争末期には工

場などに狩り出され、戦後はある時は「職場へ」、また他の時には「家庭へ」という風に、キャンペーンは変化してきた。現在は、理念的には完全に自由に選べるようになっている。このようにさまざまな刺激にさらされ、またそれに順応したり、逆ったりする女性はどのように生活しているのだろうかという疑問ないし関心が女性を研究対象として選ばせたわけである。もちろんこれに随伴して男性の方も考えなければならない。

（本稿は、56年10月の生活科学研究会において話したことに手を加えたものである）